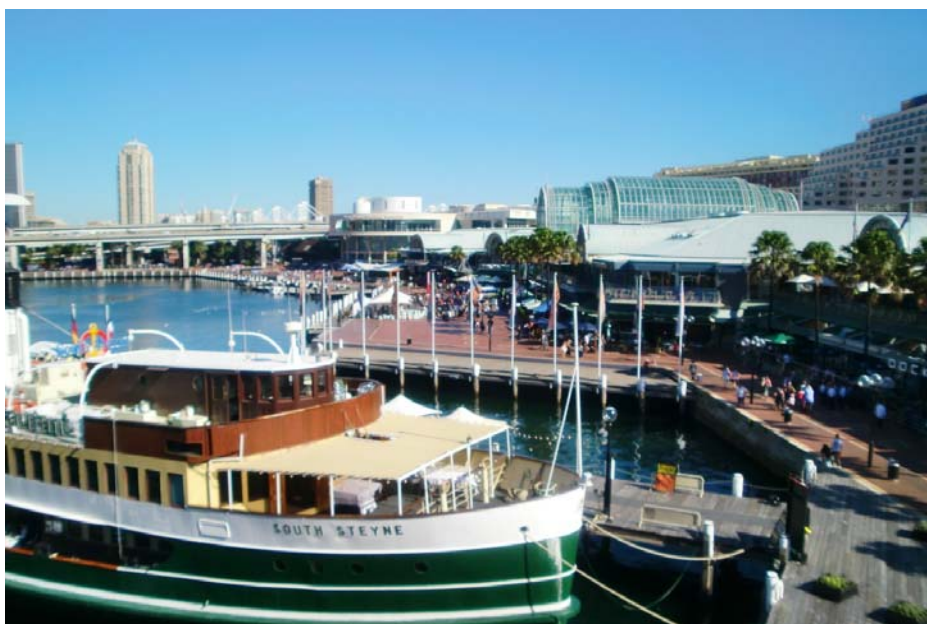


## 1. はじめに

4年毎に行われる国際測量者連盟の総会がオーストラリアのシドニーで開催された。今回の総会はこれまで開催された総会の中で最大規模の総会であり、約100ヶ国から2200名以上の参加者と大盛況であった。会議の行われた場所は、シドニーのダーリング港に面した広大な公園、庭園、博物館、ショッピングモール地域の中に建てられている多目的ホールのコンベンションセンターであった。ここは、日本のパシフィコ横浜を思わせるようなコンベンションセンターで、2007年のAPEC会議が開催された所でもあり、シドニーの中心地区に近く便利な場所であった。



中央後方の円形の建物がコンベンションセンター



シドニータワーから見たコンベンションセンター（左上方カタツムリ形状）

FIG2010 シドニーの会議日程は以下の通りであった

	4月11日 日	4月12日 月	4月13日 火	4月14日 水	4月15日 木	4月16日 金
午前	総会	委員会	技術講演	技術講演	技術講演	会長会議
午後	総会	開会式 全体会議 1 技術講演	全体会議 2 技術講演	全体会議 3 技術講演	全体会議 4 技術講演	総会 閉会式

会議では初日と最終日に総会が、また毎日プレナリーセッションと呼ばれる全体会議とテクニカルセッションと呼ばれる技術講演が行われた。

4つの全体会議では、測量のグローバルな問題、すなわち気候変動や災害リスク管理、土地管理といった問題への挑戦と G 空間情報社会、将来技術の問題が取り上げられた。また会議と並行して商業展示会も開催された。最初に総会から見ていこう。

## 2. 総会



総会での会長挨拶

総会は F I G の最高意思決定機関である。4 年毎に開催され会長や副会長の選出、各分科会

委員長の指名、予算の承認、新規会員の承認といった重要事項が執り行われる。総会は会議初日と最終日に行われた。まず **Enemark** 会長による開会宣言に続いてロールコールと呼ばれる出席会員の点呼で会議は始まった。最初の承認事項は新規の会員ならびに除名会員の承認であった。除名は会費未納が3年続くと行われる。新規、除名あわせた現在の会員数は、正会員が99、連携会員が32、企業会員が35、学会会員が89、連絡員が18ということであった。

次に会長から4年間の会長期間中の成果と総括があった。その中で **FIG** の歴史始まって以来のたくさんの報告書を出すことができたこと、会員は毎年増え続けていること、分科会の多くは、4年の任期終了にあたり報告書を準備してくれていること等の報告が述べられた。

その後、**FIG** 常設機関の報告、**FIG** 財団の報告、タスクフォースの報告や2009年の**FIG** の会議の報告、決算書、予算書の承認と続いた後会長、副会長選挙の議題へ入った。今回の選挙で今後4年間（2011年－2014年）の**FIG** 執行部体制が決まることになる。初日の総会では各候補者の立候補演説が行われ、実際の投票は最終日の総会で行われた。

会長候補者は、

**Mr. Iain Greenway** (イギリス)

**Mr. Matthew B. Higgins** (オーストラリア)

**Mr. Teo CheeHai.** [マレーシア]

の3人であった。いずれも現在副会長の職にある人である。4月16日（金）の最終日に行われた総会はかなりスリリングであった。第1回投票で **Greenway** 氏が脱落し、第2回目投票で **Higgins** 氏と **CheeHai** 氏の決選投票となった。結果は33票対34票という1票差でマレーシアの **CheeHai** 氏に決まった。日本は出席者5人の合議でアジア人の会長をということで投票に臨んだので望み通りとはなかった。



新会長の Teo CheeHai 氏へ当選のお祝いの挨拶

副会長候補者は

Dalal S. Alnaggar (エジプト)

Dr. Chryssy Potsiou (ギリシャ)

Prof. Rudolf Staiger (ドイツ)

の 3 人であった。同じく最終日の総会での投票の結果 Potsiou 氏と Staiger 氏が任期 4 年の副会長に Alnaggar 氏が任期 2 年の副会長にそれぞれ選出された。Potsiou 氏と Staiger 氏はともに分科会の委員長である。今回初めて FIG の総会に出たが、FIG の執行部に入るには、まず分科会で長年研究発表を重ねた後、分科会の委員長の経験を積み、次に副会長、会長とステップアップしていくのが一般的なようである。現会長も現副会長も皆そのようにして選ばれてきている。日本の大学の研究者の中から早くそのような人材が出てくる日を待ち望みたいという思いにかられた総会であった。そのためには FIG の日本での認知度を上げる必要性を痛感した次第である。



日本の代表団席、ケニアとジャマイカの間

最後は 2014 年の FIG 総会開催地の決定である。候補地は  
クアラルンプール（マレーシア）  
イスタンブール（トルコ）

の 2 都市であった。初日は立候補演説だけで、投票は最終日の総会で行われた。結果はクアラルンプールに決定した。これはアジアで初の総会開催だそうである。これでマレーシアは会長と開催地の両方で勝利したことになる。国に勢いのある時はこのようなものであろう。今回初めての総会出席であったが、日本代表ということで各候補者（候補地の代表者も）からはレセプションの会場等で個別の投票要請があり、測量分野とはいえ国際的な駆け引きに参加している雰囲気を感じた会議であった。



2014 年 FIG 総会開催地決定直後のマレーシア応援団

次に開会式の様子を見てみよう

### 3. 開会式

開会式は4月12日（月）に行われ、会長の開会宣言で始まった。その後オーストラリア先住民であるアボリジニの歌とダンスによる歓迎の儀式があった。カナダのオリンピック開会式の時のインディアンに対するのと同様のオーストラリア人の屈折した感情が感じられ興味深かった。



アボリジニの歌とダンスによる歓迎

基調演説は、オーストラリアを代表する思索家であり、国際的に認められている科学者、自然保護論者である **Tim Flannery** が行った。

**Tim Flannery** は、南オーストラリア博物館の前館長であり、現在はシドニーマッカーリー大学の教授である。彼は、2005年にはオーストラリアのヒューマニスト オブザイヤーに、2007年にはオーストラリアン オブザイヤーにそれぞれ選ばれている。

基調演説では今回の会議のテーマである「挑戦」に関連して、21世紀の大きな挑戦課題のひとつである気候変動の問題が取り上げられた。

彼の草分け的な著書「気候変動：人類はどのように気候を変えてきたか。生命体地球に及ぼすその影響」に述べられている考えに基づき、気候変動と地球温暖化や人類活動との関係について言及した。またこの地球温暖化の傾向をストップさせ、人類が地球環境にあたえたダメージを取り戻す戦略についても述べた。 **Tim** にとっての最終ゴールは、すべ

ての人が自分自身が気候変動を起こしているのであり、手遅れになる前に新たなる挑戦に  
いどむしか選択肢はないことに気付くようまわりの人を動かすことであるとの主張であっ  
た。

次に全体会議（プレナリーセッション）を見てみよう。

#### 4. 全体会議

全体会議はテーマ毎に招待基調演説と討議が行われるものであり、4つ開かれた。

全体会議1では、FIG評議会と委員会の4カ年(2007-2010)計画の評価が行われた。FIG  
会長の基調演説やFIG事務局の発表に基づき、評議会や委員会の仕事の評価が行われ、FIG  
の対外的な協定や発表、出版物等の成果が示された。

FIG会長 Stig Enemark の基調演説では、2007年-2010年の会長期間中に達成したことが  
述べられた。 FIG会長 Stig Enemark は、デンマークのアールボルグ大学土地管理学  
科の教授である。1991年-2005年の間は、同大学の測量計画部長を務め、2003年-2006  
年の間は、デンマーク測量者連盟の会長であった。また 1994年-1998年の間は、FIG  
第2分科会の委員長であった。 Enemark が大会のテーマとして掲げた「新たなる挑戦-  
能力開発-」というのも、彼が第2分科会の委員長であったことが基になっている。単に  
個人レベルの自己学習だけではなく、大学や行政組織の中での測量教育を含む広い意味で  
の能力開発をすすめていくことの重要性を示したのである。



全体会議の様子

## 全体会議 2

全体会議 2 では、G 空間情報社会へ向かって加速している現状とそれが測量に及ぼす影響について 3 つの基調演説が行われた。

最初の Abbas Rajabifard は、GSDI（グローバル空間データインフラ協会）の会長としての経験に基づき、G 空間情報社会へと向かっている中で直面している問題について話した。Abbas Rajabifard は、メルボルン大学ジオマティクス学部の準教授で、SDI 土地管理センター長でもある。

次に全米地理歴史協会（PAIGH）の事務局長 Santiago Borrero は、ラテンアメリカ地域で G 空間情報政府を構築しようとする際の問題点について概観した。Borrero は、コロンビア出身で 1977 年 MIT を卒業しており、GSDI 会長の経験もある。

最後にオーストラリアーニュージーランド土地情報協議会（ANZLIC）議長である Warwick Watkins は、オーストラリアーニュージーランド地域でどのように G 空間情報政府が構築されているかについて述べた。彼は、ニューサウスウェールズ州土地局長官であり、測量局長、土地登録局長、土壌保全局長でもある。

## 全体会議 3

全体会議 3 のテーマは、“挑戦”である。21 世紀の大きな挑戦のなかで測量にも関わる 3 つの挑戦、気候変動と災害管理、土地管理について取り上げられた。

最初に災害管理について、Daniel Fitzpatrick が演説を行った。自然災害に伴う土地問題、特に開発途上国の土地システムの脆弱性とその克服について焦点をあて、具体例としてインドネシア津波災害の例を取り上げた。彼は、オーストラリア国立大学の法律学の講師である。またインドネシア津波災害 2005-2006 の国連土地問題顧問でもある。

次に国連の Dr. Paul Munro-Faure が、国連食糧農業機関（FAO）の土地管理、特に土地や資源の所有についての信頼できる管理のガイドラインについて話した。彼は、FAO の土地所有、管理部門のチーフであり、1998-2002 の FIG 第 7 分科会委員長であった。

最後に国連人間居住計画（UN-HABITAT）の Dr. Mohamed El Shioufi が、気候変動と持続可能な都市について話した。彼は、32 年間建築や都市計画に携わってきており、1995 年から HABITAT に関係している。

## 全体会議 4

全体会議 4 では、これからの測量に影響を与える技術について、3 つの異なる視点での基調演説が行われた。

最初の基調演説者 Mary O’Kane は、現在ニューサウスウェールズ州の主任科学官である。科学研究の果たしている大きな役割についてのべたオーストラリア政府の最近の 2 つの報告書に関連した自身の経験について述べた。オーストラリア空間情報共同研究センター長として、科学技術の問題を測量に関連させて述べた。彼女は、1994-96 の間はアデレード大学の研究担当副学長で、1994-96 の間は学長を務めている。



次の基調演説者 Ed Parsons は、グーグルの G 空間情報技術者であり、世界中の情報をグーグルアースやグーグルマップを使って体系化するというグーグルの使命と将来像について述べた。彼は、グーグルに入る前は英国の陸地測量局主任技術者であった。

最後は、FIG 副会長の Matt Higgins が、最近急速に進展している測位技術とユビキタス測位インフラの動向、ならびにそれらが FIG 会員に及ぼす影響について語った。Matt Higgins は、オーストラリア、クイーンズランド州政府、水天然資源部主任測量顧問である。2008 年オーストラリア GNSS 協会の会長に選ばれている

次に技術講演について紹介しておこう。

## 5. 技術講演

技術講演は 10 の分科会毎に併行して行われた。発表論文数は約 800 にものぼりテーマも実に様々であった。また今回から従来からの非査読論文に加えて初めて査読論文の提出も受け付けている。発表論文のテーマは、例えば 14 日の午前中の技術講演を見てみれば以下のようである

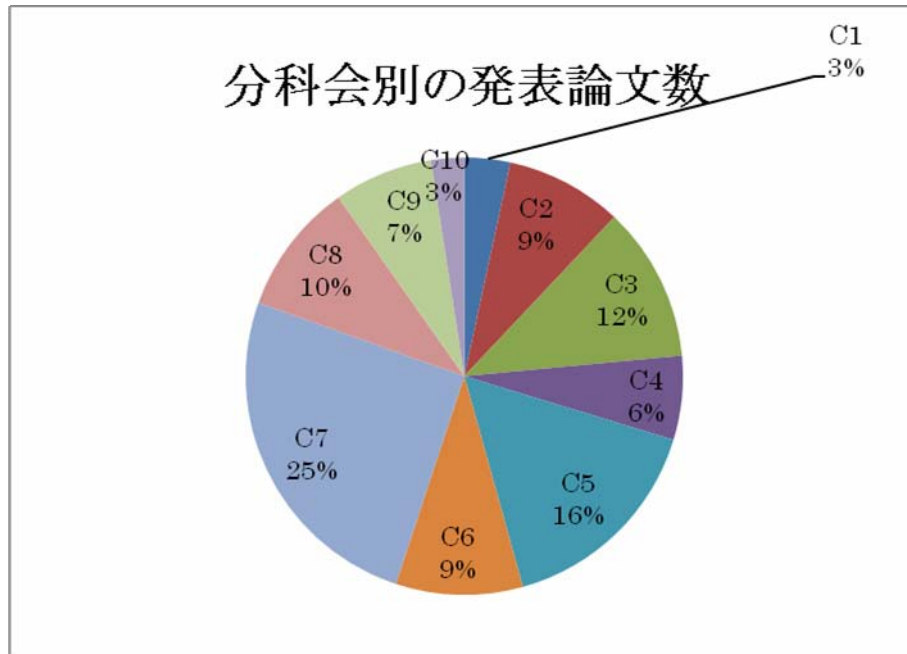
テーマ	分科会番号				
土地行政	C7	空間情報インフラ	C3	測地観測システム	C5
品質管理	C5,6	都市計画	C8	不動産鑑定	C9
e ラーニング I	C2	応用測量 I	C6	土地行政	C7,5
測量資格	C1	土地行政	C7		

これを見ても FIG で議論している測量の分野の広さが分かるであろう。



技術講演の様子

ちなみに、分野毎の発表論文数は以下のようなものである



一番多いのは第7分科会：地籍の分野で次が第5分科会：測地の分野と第3分科会 GIS の分野で、現在の関心事がどこを向いているかを示している。日本の GIS や測地分野の研究者にはぜひ参加していただきたいと感じた次第である。

## 6. 展示会

会議場の隣では、測量関連会社による商業展示会が開かれていた。これは2010年に南半球で開催される展示会のなかで最大のものということであったが、会場の広さは50m四方程度であったろうか。規模としては日本の測量技術大会の時の展示会よりは若干小さめという感じであった。良い工夫であると思ったのは、展示会場のなかに軽食と飲み物が用意され、会議出席者が昼食休憩を兼ねて展示が見れるようにしていたことである。これも盛況であった。



展示会の様子



展示会の様子

## 7. レセプション

会議の後は毎日レセプションかディナーが用意されて、出席者が退屈しないようオーストラリア組織委員会の企画が用意されていた。

ちなみに 11 日（日）はタウンホールでの歓迎会、12 日（月）は FIG 基金主催の夕食会、13 日（火）はオーストラリア総督官邸での招待レセプション、14 日（水）はホームビジットといってオーストラリアの一般家庭への夕食招待、15（木）は組織委員会主催の gala デイナー、16（金）はサヨナラパーティーという具合であった。



タウンホールでの歓迎レセプション



オーストラリア総督官邸での招待レセプション（後方右の女性がオーストラリア総督、中央の女性は次期 FIG 副会長）



Gala ディナーの様子

## 8. テクニカルツアー

会議期間中様々なテクニカルツアーが用意されていた。ここでは筆者の参加したシドニーでの測量の歴史を探訪するツアーについて紹介しよう。シドニーはオーストラリアで最初に植民がはじまった場所である。その時代の測量の跡が色々と残っており、土地局の人の説明を聞きながら歩くツアーであった。またシドニーブリッジやオペラハウスの建設に伴う測量についての説明もあった。



土地局のビルの中にある基線場跡



ビルの壁面にある水準標



シドニーブリッジ建設時の測量の様子

## 9. おわりに

今回会議は盛況であったが、残念なことに日本からは私の他に日本土地家屋調査士連合会からの4人の計5人だけであった。ほとんどの国で大学や政府の測量関係機関、研究所からの派遣者が見られたことから、FIGの日本での認知度の低さにいさかきさびしさを感じた次第である。特に今回は各国の政府測量関係機関からの代表者を集めての特別フォーラムもあり、それに日本の政府関係者が見られなかっただけになおさらであった。4年後の1014年のクアラルンプールFIG総会会場で、日本が1018年の総会開催地として立候補している幻がチラッとよぎったが、現在の日本測量者連盟の体制と現在の日本でのFIGの認知度では無理だとすぐに頭から追い払った。これがいつかは正夢となるように日本で測量、地図に関係するより多くの政府関係機関、学会関係者、大学研究者がFIGに対して関心を持ちFIGの各種会議に参加してくれるようになることを願うばかりである。